

2022年11月30日(水)

老球の細道703号

11月の言葉

バスケットボールコーチ 室井 富仁

ウクライナ戦争よりサッカー・ワールドカップのニュースが上位を占める昨今である。世の中、国外も国内も暗い話題ばかりなのでサッカーで明るく元気にしようということなのか。日本のアップセットで大騒ぎの後、思わぬ敗戦。サッカーもまた暗い話題になってしまうのか。来年はバスケットボール男子ワールドカップが沖縄で開催される。その頃は戦争もコロナも終結して、世界中で純粋にスポーツに酔いたいものである。

1・テレビから

◆「ハングリーであれ(Stay hungry) 愚かであれ(Stay Foolish)」〈NHK・映像の世紀『世界を変えた愚か者・フラーとジョブズ』〉：コンピューターで世界を変えたスティーブ・ジョブズの言葉を久しぶり聞いた。英国哲学者J・S・ミルも「満足した豚より、腹をすかしたソクラテスであれ」と。訳知り顔の常識人が多い中、難局で頼れるのは「愚かな隣人」、地域を変えるのは「よそ者」「若者」「馬鹿者」である。

2・読書から

◆「たったひとりしかいない自分を、たった一度しかない一生を、ほんとうに生かさなかったら、人間生まれてきたかいないじゃないか」〈山本有三著『路傍の石』河出書房〉：世界中であまりにもあっけなく死んでいく人が後を絶たない今、改めて残り少ないわが人生を見つめなおさせてくれた言葉であった。人はいずれ死ぬ。好きなことをとことんやろう。

◆「傷がなつかしくなるようでは傷の効力もおしまいである。賞賛と安定を求める心の弱さを断ち切るために、傷を自己の眼前に絶えずさらすことが必要」〈梅原猛著『日常の思想』集英社〉：自己の腐敗はぬるま湯の中で自己満足するところから起こることを自戒せよ。

3・新聞、パンフレット等から

◆「毎朝、自らに問いかける。なぜ、お前は目覚めたのか、と。その答えが目的になる。そして思う。“サッカーは楽しむもの。その素晴らしさを指導者として育み、伝えていきたい”」〈朝日：ひと：横浜F・マリノス監督ケビン・マスカット〉：夜中にトイレに起きる。朝方は夢見て足をつりながら目覚める。夢は常にバスケットボール選手時代のこと。あの頃は本当に楽しかった。そのような楽しさを選手たちに伝えてきたか？自問自答の日々である。

◆「ベストプレイヤーは特定の選手ではなくチーム」〈朝日：元Jリーグ監督ミハイロ・ペトロビッチ〉：低いレベルのゲームは個人の力でも勝てるが、本物の戦いはチーム力がものを言い、個人技はチームプレイの中で輝く。「TEAM」のスペルに「I(私)」はない。

◆「人生は青いほうがいい。熟れないほうがいい。最後まで青いままで行く」〈朝日：折々のことば：安藤忠雄〉：コンクリート打ちっぱなし建築で有名な日本屈指の建築家。身体の内をガンで冒されながらも自分の目指すこと、信じることを貫き通すゲリラとしての生き方を決心する。私も訳知り顔の爺より永遠の初心者でありたい。